THE ANNUAL REPORTS OF
HEALTH, PHYSICAL EDUCATION
AND SPORT SCIENCE
VOL.16,47-53,1997

原　著

大学体育実技における教師の社会的勢力と授業効果

The relationship between social power of teacher and results at physical education class in university

多田　聡*, 坂本昭裕**,
川田儀博***, 永嶋秀敏****

Satoshi TADA *, Akihiro SAKAMOTO **,
Yoshihiro KAWADA *** and Hidetoshi NAGASHIMA ****

ABSTRACT

The purpose of this study was to clarify the relationship between social power of teacher and results at physical education class in university. The subjects were 315 first-year students attended physical education classes on campus, and 121 first-year students attended ski intensive practicums. All subjects were answered the Perceived Social Power Scale (PSPS) on 24 items and nine questions about results at class.

The main results were as follows.

1) The order of power resource perceived by student were as follows : At class on campus it was legitimate power = expert power > attraction power = reward power > referent power > coercive power, and At ski intensive practicums it was expert power = reward power = legitimate power = attraction power > referent power > coercive power.

2) All power resources were related with results at physical education class. Only coercive power was negative relation.

3) Students perceived expert power, reward power, attraction power and referent power of teachers at ski intensive practicum stronger than at class on campus.

Key words; physical education class in university, teacher, social power, power resource, results at class

はじめに

大学の自己点検・評価の必要性が指摘され、各大学においても実施・公開が進んでいる。そうした中で学生による授業評価を実施する大学も増えているが、まだまだその数は少ないようである[13]。大学が大衆化し学生のニーズも多様化していく中、大学授業の中でもしっかりと授業を点検・評価し、それを生かした授業研究が行われるべきであろう。しかし、実際問題として一個人が担当する授業を評価するということは、心情的にも、また誰が評価するのかといった問題としても実施しにくいも

* 青山学院大学（Aoyama Gakuin University）
** 図書館情報大学体育・保険センター（Sport and Health Science Center, University of Library and Infomation Science）
*** 国士舘大学体育学部野外教育教室（Lab. of Outdoor Education, Faculty of Physical Education, Kokushikan University）
**** 国士舘大学体育研究所（Institute of Health, Physical Education and Sport Science School of Physical Education Kokushikan University）

のであり、これまで積極的には行われてこなかったのが実状である[15]。大学授業を有意義なものとして質を高めていくために、大学授業に関する評価研究は不可欠なことであると思われる。中でも、教師についての評価は重要である。八並[20]は、学生評価からみた『良い授業』について調査を行った。因子分析により要因を抽出したところ、一般教育において最も寄与率の高かった第一因子として「教員の人格」因子をあげている。そうした授業研究・教師の評価の流れは、体育分野においても同様であり、避けて通ることのできない課題であると思われる。本研究では、評価の観点の一つとして大学体育実技における教師の社会的勢力をとりあげ、その特性を明らかにするとともに授業成果との関連について検討することにした。

社会的勢力については様々な定義が出されているが、今井[9]はそれらの定義をまとめて「自分（影響者）の望むように他者（被影響者）の意見・態度・行動を変化させることのできる能力」であると述べている。さらに付け加えるならば、その影響者が実際に及ぼす影響力のみでなく、潜在的な影響力を対象としている点があげられる。教育場面を例にとると、体育教師に対して「あの先生は体育の先生だしスポーツは何でもできそうだから、言うとおりに授業を受けていればきっと私のテニスも上手になる」と学生が思ったとする。そのとき、本当にその教師にとってテニスが上手であるとは限らないわけであるが、学生は体育教師であるという背景から判断して、教師の影響を受け入れているのである。このような状況の時、その学生は体育教師から社会的勢力を受けていると考えるのである。教師側（影響者）の直接的な行動だけではなく、このように、学生（被影響者）の認識に基づいた教師の潜在的な影響力について取り扱うことが社会的勢力の一つの特徴である[2]。また、社会的勢力研究の分野では、その社会的勢力がどのような要因で構成されているかといったサブカテゴリーを示す社会的勢力の資源（勢力資源）を明らかにする研究、また、それら勢力資源の特性を解明していこうとする研究が多く見られる[9]。本研究においてもそのような勢力資源に着目して研究を進めていく。

勢力資源に関する代表的な研究としてFrench & Raven[2]による5つの勢力資源に関する研究がある。彼らは勢力資源として「報賞勢力」「強制（罰）勢力」「正当勢力」「参照勢力」「専門勢力」をあげ、これらの勢力資源の特性について述べている。以後、多くの研究がこの5つの基盤をもとに展開されている。今井[8]は、これら5つの勢力資源の妥当性を検討するために他の研究との対比を行い、他の研究に見られる多くの勢力資源は、ほぼFrench & Raven[2]の示す勢力資源に対応させられることを見いだし、さらに、好意（魅力）勢力を新たに加えて6つの勢力資源を基に研究を進めている[11, 12]。本研究においても、この6勢力資源を対象に検討していくこととする。

また、本研究に関連深い教育場面における教師の勢力資源についてを検討した研究として、因子分析を用いて勢力資源の因子を抽出した研究[7, 16]、勢力資源の特性、効果性について検討したもの[5, 17, 18]がみられる。しかし、小・中・高校といった場面で行われたものが多く、大学場面を対象にした研究は少ない、また、体育教師に関する研究はさらに少なく、大いに検討されるべきであろう。

本研究では、大学体育教師の社会的勢力について、各勢力資源間の比較ならびに授業成果との関連について検討していく。なお、体育実技は様々な授業形態で実施されているが、本研究では特に学内において半期間で開講された学内実技と、学外において短期集中授業として実施されたスキー実習を取り上げた。

方　法

対象者　体育実技授業において学内実技を選択し受講した大学1年生325人（男子154人、女子171人）、及び、スキー実習を選択し受講した大学1年生126人（男子67人、女子59）。

対象授業　対象とした授業は、全て体育実技の１単位が認められているものである。学内実技は、1996年９月から翌年１月までの13週にわたって行われた。学生は、種目の選択にあたって受講する曜日時限が決められており、その枠内で３～４種類の種目のうち１種目を選択する。対象とした授業種目は、バドミントン、テニス、ゴルフ、バレーボールであり、人数の内訳は１クラス30人から52人で構成された全８クラスであった。合宿形式の集中授業で実施されたスキー実習は、1996年12月及び1997年２月にそれぞれ４泊５日の日程で行われた。２月に実施された授業の概略を表１に示した。受講学生９人から15名に１人の割合で、教師がつきスキーの指導にあたった。

質問紙　教師の社会的勢力を測定する質問紙として、Imai[12]（和訳は今井[9]から引用）の社会的勢力測定尺度（PSPS）を用いた。この尺度は、６種の勢力資源それぞれに対し４つの質問項目を割り当てたもので、全24項目からなる。回答は「全くそう思わない～非常にそう思う」までの７件法となっている。各勢力資源に関する項目は、片寄らないように配置した。この測定尺度は、対象者が誰でもよい設定になっており、これまでの先行研究との関連による知見が得られること、また、今後教師の勢力に関する研究を深めて行くにあたって他教科との関連、教師以外の他分野との関連などを検討することが可能になること、そして項目数が限られているため回答者の負担が少ないなどの点で有効であると思われた。

授業の成果に関する質問項目は、体育科教育に関する専門書[1, 19]の中より体育の目標・成果と考えられる９項目（技術の習得、健康の維持増進、仲間との親睦、楽しさなど）をあげ、同様に７件法で回答した。

手続き　調査は、学内実技授業についてはクラスごとに最終の授業の終わりに実施し、スキー実習では、最終日の昼食後に全員で実施した。また、両群とも実施にあたっては「授業の成績とは全く関係がない」ことを告げ、無記名とした。

結　果

回答に不備のあった調査用紙を除いたため、有効回答数は、学内実技315人（男子149人、女子166人）、スキー実習、121人（男子62、女子59人）となった。質問項目は社会的勢力測定尺度、授業成果ともに「非常にそう思う」を７点、「全くそう思わない」を１点とし、中間段階を１点きざみで得点化した。社会的勢力については、各々の勢力資源に該当する４項目の平均を各勢力資源の得点とした。授業成果については構成する９項目の平均を得点とした。授業成果に関する９項目のα係数は0.87であり、一定の基準を満たす値であると考えられ、総体として授業成果を表現しうるものとみなされた。

１）勢力資源間の比較

授業形態別に６種類の勢力資源の得点を比較した。表２及び表３は各勢力資源の平均と標準偏差

表1　スキー実習の概要（2月に実施）

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目
午前	大学出発	実技講習	実技講習	実技講習	実技講習 テスト
午後	現地到着 班分け	実技講習	実技講習	実技講習	昼食後調査 現地出発 大学帰着
夜	ミーティング	講義	ナイタースキー	ナイタースキー	

※ナイタースキーは希望者のみが行った。

であり、図１・図２はそのグラフである。授業形態別に一元配置の分散分析を行った結果、勢力資源間の効果は両授業形態ともに有意であった（学内実技：F（5,314）=177.72、スキー実習：F=（5,120）=121.49,いずれもp<.01）。ＬＳＤ法を用いた多重比較よる結果、学内実技においては、正当－専門勢力間、報賞－好意勢力間で有意な差が見られず、その他の勢力資源間では、差が有意であった（MSe=0.83,5％水準）。したがって、その大小関係は、正当勢力＝専門勢力＞好意勢力＝報賞勢力＞参照勢力＞罰勢力であった。一方、スキー実習においては専門－報賞勢力間、専門－正当勢力間、報賞－正当勢力間、正当－好意勢力間で有意な差が見られず、その他の勢力資源間では差が有意であった（MSe=0.79,5％水準）。したがって、勢力資源間の平均の大小関係は、専門勢力＝報賞勢力＝正当勢力≧好意勢力＞参照勢力＞罰勢力であった。

表2　学内実技における勢力資源の得点（N＝315）

	正当勢力	専門勢力	好意勢力	報賞勢力	参照勢力	罰勢力
M	4.54	4.44	4.02	3.89	3.20	2.81
SD	1.08	0.96	1.22	1.15	1.16	1.17

表3　スキー実習における勢力資源の得点（N＝121）

	専門勢力	報賞勢力	正当勢力	好意勢力	参照勢力	罰勢力
M	4.99	4.98	4.80	4.72	3.76	2.77
SD	0.93	0.95	1.01	1.11	1.18	1.12

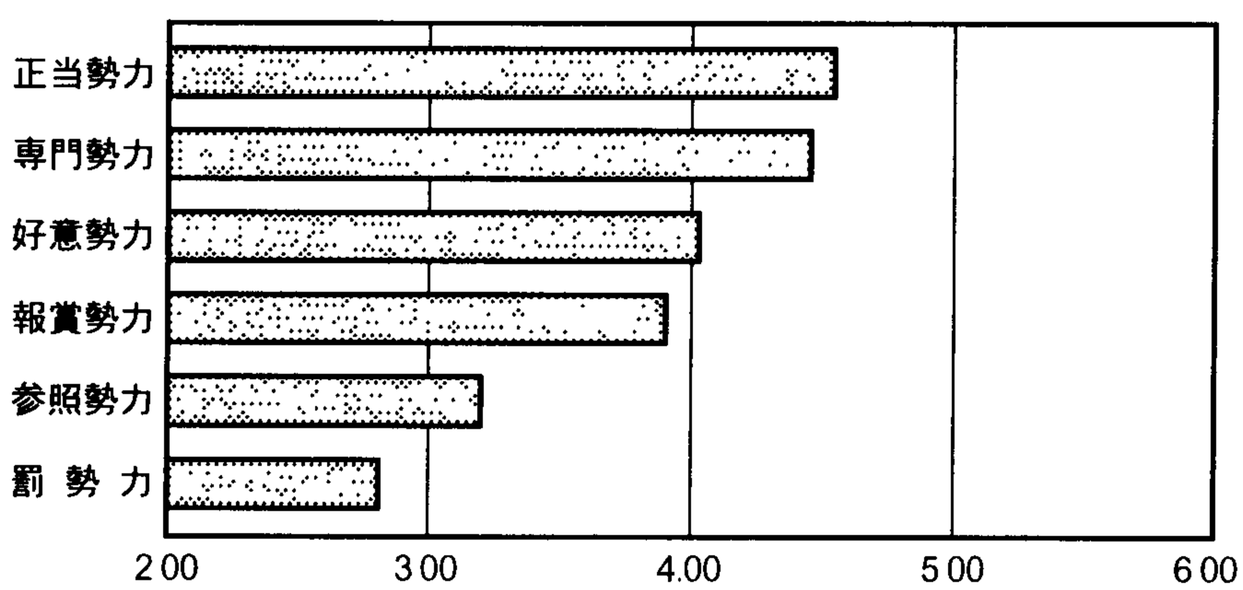

図1　学内実技における勢力資源の得点

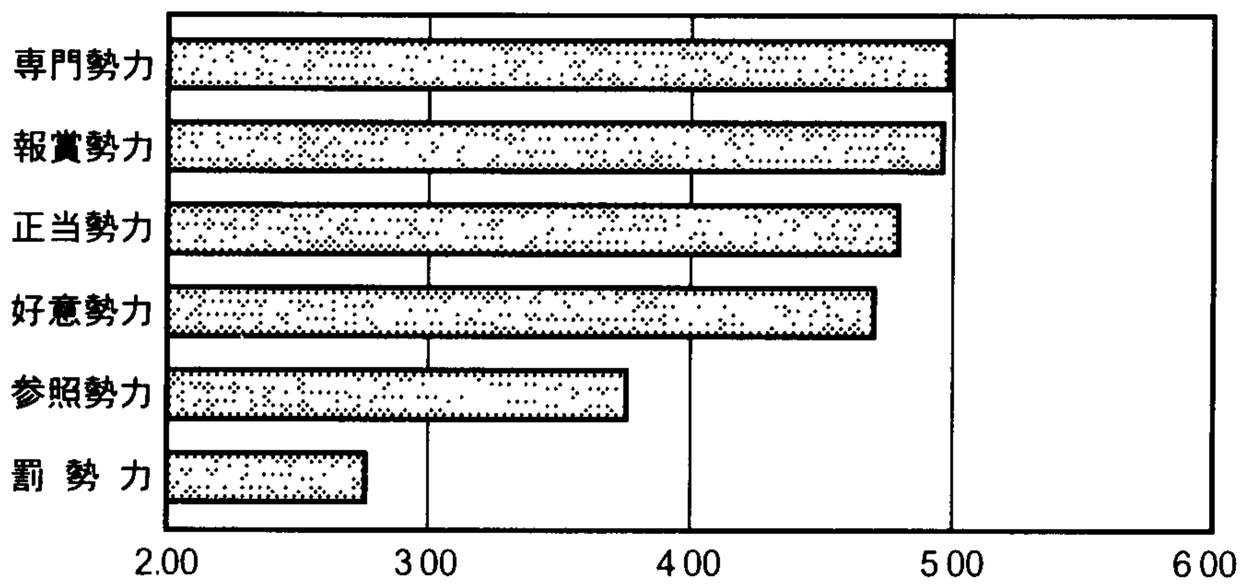

図2　スキー実習における勢力資源の得点

２）授業成果との関連

授業成果については、その得点から上位１／３および下位１／３を抜き出し、上位群、下位群として群分けした。その際、各群の人数はなるべく等しくなるよう分けた。そして、勢力資源ごとの得点について授業形態（２水準）×授業成果（２水準）による２要因の分散分析を行った。勢力資源ごとの各要因への割当人数および平均・標準偏差を表４に、グラフを図３に示した。また、分散分析の結果を表５に示す。それによると、すべての勢力資源で交互作用は有意でなかった。そこで、主効果をみていくと、専門勢力、報賞勢力、好意勢力、参照勢力では、授業形態、授業成果ともに主効果が有意であった。すなわち、スキー実習の方が学内実技より、また、授業成果の上位群が下位群より、これらの勢力資源を強く認知していた。そして、正当勢力と罰勢力では、授業形態の主効果は有意でなく、授業成果の主効果は有意であった。すなわち、正当勢力は授業形態に左右されず、授業成果では上位群の方が下位群より強く認知していた。罰勢力は、正当勢力と同様に授業形態には左右されない

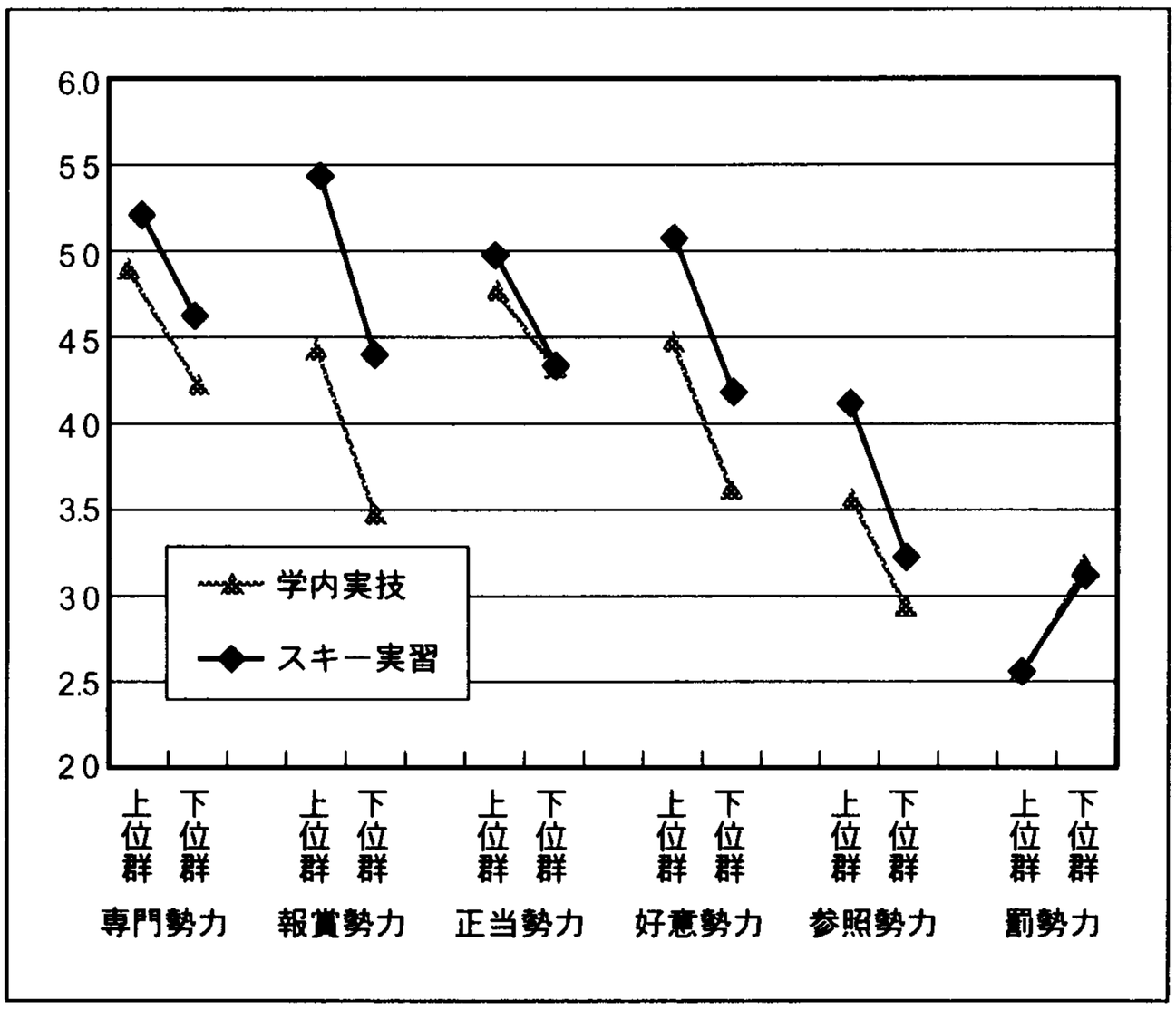

図3　授業形態・授業成果別にみた勢力資源得点

が、授業成果の面では他の５つの勢力資源とは逆に下位群の方が上位群より罰勢力を強く認知しているという結果であった。

考　察

勢力資源間の比較を見ると授業形態の異なる両群において、どちらについても学生の認知か強かった勢力資源は、専門勢力、正当勢力、好意勢力、報賞勢力であった。総合的にみて、学生はこれら４つの勢力資源を大学体育教師から感じながら授業を受けているものと思われる。大学体育教師は体育スポーツに関する専

表4　授業形態・授業成果別にみた勢力資源の得点

勢力資源	授業形態	授業成果	N	M	SD
専門勢力	学内実技	成果上位群	109	4.77	0.83
		成績下位群	102	4.23	0.99
	スキー実習	成績上位群	43	5.19	0.90
		成績下位群	39	4.60	0.93
報賞勢力	学内実技	〃 上 〃	109	4.42	1.10
		〃 下 〃	102	3.45	1.11
	スキー実習	〃 上 〃	43	4.97	0.83
		〃 下 〃	39	4.40	1.00
正当勢力	学内実技	〃 上 〃	109	4.77	1.04
		〃 下 〃	102	4.36	1.18
	スキー実習	〃 上 〃	43	4.97	0.83
		〃 下 〃	39	4.35	1.06
好意勢力	学内実技	〃 上 〃	109	4.46	1.20
		〃 下 〃	102	3.62	1.20
	スキー実習	〃 上 〃	43	5.06	1.04
		〃 下 〃	39	4.19	0.92
参照勢力	学内実技	〃 上 〃	109	3.56	1.16
		〃 下 〃	102	2.94	1.22
	スキー実習	〃 上 〃	43	4.12	1.09
		〃 下 〃	39	3.22	1.12
罰 勢 力	学内実技	〃 上 〃	109	2.56	1.06
		〃 下 〃	102	3.19	1.19
	スキー実習	〃 上 〃	43	2.55	1.14
		〃 下 〃	39	3.12	1.10

表5　勢力資源に関する授業形態×授業成果の分散分析表

勢力資源		SS	df	MS	F	
専門勢力	授業形態	9.22	1	9.22	11.10	**
	授業成果	18.72	1	18.72	22.55	**
	形態×授業	0.04	1	0.04	0.05	n.s.
	誤差	239.24	289	0.83		
報賞勢力	授業形態	56.63	1	56.63	51.95	**
	授業成果	59.50	1	59.50	54.59	**
	形態×授業	0.07	1	0.07	0.06	n.s.
	誤差	314.32	289	1.09		
勢力	授業形態	0.57	1	0.57	0.50	n.s.
	授業成果	15.43	1	15.43	13.53	**
	形態×授業	0.60	1	0.60	0.53	n.s.
	誤差	329.88	289	1.14		
勢力	授業形態	20.35	1	20.35	15.53	**
	授業成果	43.21	1	31.21	32.98	**
	形態×授業	0.01	1	0.01	0.01	n.s.
	誤差	378.68	289	1.31		
勢力	授業形態	10.60	1	10.60	7.85	**
	授業成果	33.98	1	33.98	25.17	**
	形態×授業	1.13	1	1.13	0.84	n.s.
	誤差	391.31	289	1.35		
勢力	授業形態	0.90	1	0.90	0.71	n.s.
	授業成果	20.85	1	20.85	16.55	**
	形態×授業	0.06	1	0.06	0.05	n.s.
	誤差	363.62	289	1.26		

**$p<0.01$

門性を学生に認められ、それを背景としながら親しみやすく、優しい存在として学生に受け入れられており、したがって、今回対象となった授業に関しては、受講学生に対し比較的良好な関係で授業を進めていたものと思われる。ただし、参照勢力と罰勢力についてみると、これらの勢力資源の認知が弱いことを見過ごすことはできない。参照勢力の認知の弱さは、すなわち、専門的な知識や技能といった面、または好感度といった面では、体育教師を認めるが、尊敬や理想の対象といった高い次元では認めていないということであろう。また、罰勢力に対する認知は、極端に弱く、このことはよい関係づくりのための配慮と受け取れる反面、放任的で学生に迎合した授業に偏っているとも考えられる。罰勢力を一概に否定できないとする研究もみられ[14]、一考の余地を残すものと思われる。

次に、授業成果との関連を踏まえてみていく。まず、全ての勢力資源について授業成果との関連がみられたことから、大学体育教師の社会的勢力が、そのまま授業の成果を左右する一因となっていることが示唆された。このことは、学生による授業成果に対する評価について、教師の影響力が大きな要素になっているということであり、教師が自分自身の社会的勢力について配慮する有効性を裏付けるものであったと言えよう。

また、授業形態の違いに着目すると、専門勢力、報賞勢力、好意勢力、参照勢力でスキー実習において強く認知されていた。特に報賞勢力と好意勢力については、勢力資源間における比較をみても、スキー実習では、専門勢力、報賞勢力、正当勢力、好意勢力の4つの勢力資源はほぼ同じ程度で認知されていたが、学内実技では専門勢力、正当勢力に比べ報賞勢力と好意勢力についての認知が弱かった。特に、報賞勢力はスキー実習において順位にして2番目にあげられているが、学内実技においては、4番目となっており違いが顕著である。French & Raven[2]によると、報賞勢力は強制（罰）勢力とともに、影響者に依存する勢力資源であるとされており、教師の学生に対する関与の程度や頻度に左右されるものと考えられる。そうした点から考えると、スキー実習は学内実技に比べ、一教師あたりの学生数が少なく、教師が学生一人一人と接する機会が多かった。また、スキー講習場面では、安全性の確保のためや指導形態の特性として、個別の指導を行う機会が多い、さらに、合宿形式で実施されたため、ホテルでの生活時間や講習後の自由滑走の時間など、講習時間以外で学生と接する機会も多く、学内実技のように限られた授業時間内で実技の講習だけをしていく以上に学生と関わりを持てる時間的余裕があったことも、教師の学生に対する関与を深め、報賞勢力が強まった要因であろう。こうした関与の深まりと同時にまた関連して、専門勢力や好意勢力もスキー実習において強く認知されたのではないだろうか。学内実技場面において、合宿形式で行われるスキー実習と同様な関わり方を望むことは難しいが、いずれにしても、教師の個々人への親しい関わりが学生の授業に対する評価にも反映されるということは言えそうである。学内実技においても単に技術習得や試合を一斉指導的に行うことに追われるだけでなく、学生との対話やなるべく個別指導を取り入れるなど、個々人との関わりをもつ努力が必要なのであろう。

ま　と　め

本研究の目的は、大学体育実技における教師の社会的勢力を授業成果との関連から検討することであった。学内実技を受講した大学1年生315名（男子149名、女子166）及びスキー実習を受講した大学1年生121名（男子62名、女子59名）を対象者とし、社会的勢力測定尺度と授業成果に関する調査を行った。

その結果以下のことが明らかになった。

1．学内実技における、学生による教師の勢力資源の認知は、正当勢力＝専門勢力＞好意勢力＝報賞勢力＞参照勢力＞罰勢力であり、一

方、スキー実習においては、専門勢力＝報賞勢力＝正当勢力≧好意勢力＞参照勢力＞罰勢力という関係であった。

2．すべての勢力資源において、授業成果との関連が見られた。罰勢力を除く５つの勢力資源については、授業成果と正の関係が見られたが、罰勢力だけは逆に負の関係が見られた。

3．専門勢力、報賞勢力、好意勢力、参照勢力に関する認知は、学内実技よりスキー実習において強く、正当勢力、罰勢力においてその差は見られなかった。したがって、専門勢力、報賞勢力、好意勢力、参照勢力の４勢力資源は、スキー実習における教師の社会的勢力を特徴づけるものであると考えられた。

本研究の結果から、学生の授業成果に対する評価には、教師の影響力が大いに関係していることが示唆された。スキー実習における教師の在り方は、成果を高める上で参考にすべきものであろう。学生の期待に応えうる授業成果を上げるために、教師は単に科目の内容を教授して行くだけではなく、学生との関係づくりにも注意を払っていく必要があるものと思われる。特に、その影響力の背景すなわち社会的勢力を理解していることは、きっと指導上の指標になりうるであろう。

今後は汎用的な質問紙また場面特有の質問紙を補完的に用いて、他教科、または体育授業内の種目間において教師の勢力資源を検討することや、クラス人数の違い、性による違いなどの検討、教師の接し方の違いによる検討など行っていくことで、実際の指導場面に活かせる成果を上げていくことが必要であろう。

引用・参考文献

1) 阿部忍，体育の目的・目標，体育の哲学的探求，道和書院，6-16, 1984.
2) French,J.R.P., Raven,B., The Bases of Social Power, Cartwright,D.・Zander,A.(Ed.)，studies in social power, Institute for Social Research，Universty of Michigan Press, 193-217, 1959.
3) 渕上克義，大学進学決定に及ぼす要因ならびにその人的影響源に関する研究，教育心理学研究，**32**(3): 228-232, 1984.
4) 渕上克義，進学志望の意志決定過程に関する研究，教育心理研究，**32**(1): 59-63, 1984.
5) 渕上克義，教授－学習場面におけるリーダーの専門性パワーの効果，教育心理学会第33回総会発表論文集，487-488, 1991.
6) 浜名外喜男，天根哲治，木山博文，教師の勢力資源とその影響度に関する教師と児童の認知，教育心理学研究，**31**(3): 220-228, 1983.
7) 平川澄子，体育教師の勢力資源に関する研究－学習者の発達段階別に見た比較を中心に－，お茶の水女子大学人文科学紀要，**41**: 129-142, 1988.
8) 今井芳昭，親子関係における社会的勢力の基盤，社会心理学研究，**1**(2): 35-41, 1986.
9) 今井芳昭，社会的勢力に関連する研究の流れ：尺度化、影響手段、勢力動機、勢力変性効果、そして、社会的影響行動モデル，流通経済大学社会学部論叢，**3**: 39-66, 1993.
10) 今井芳昭，大学生から見た「影響力のある人物」の種類と特徴，日本グループダイナミックス学会第43回大会発表論文集，236-237, 1995.
11) Imai,Y., Effects of influence strategies ,perceived social power and a cost on compliance with requests, Japanese Psychological Research, **33**(3): 134-144, 1991.
12) Imai,Y., Perceived social power and power motive in interpersonal relationships, Journal of social behavior and personality, **8**(4): 687-702, 1993.
13) 高等教育局大学課大学改革推進室，自己点検・評価の全般的傾向について（外部評価も含む），文部時報，**38**(42), 1997.
14) 森恭，伊藤豊彦，豊田一成，遠藤俊郎，コーチの社会的勢力の基盤と機能，体育学研究，**34**: 305-316, 1990.
15) 杉江修治，Ⅲ 大学の教育実践と自己点検・評価，２授業の点検・評価，東海高等教育研究所編,何のための大学評価か，84-95,大月書店，東京 ,1995.
16) 田崎敏昭，児童・生徒による教師の勢力源泉の認知，実験社会心理学研究，**18**(2): 129-138, 1979.
17) 田崎敏昭，教師のリーダーシップ行動類型と勢力の源泉，実験社会心理学研究，**20**(2): 137-145, 1981.
18) 田崎敏昭，教師の勢力資源と児童のモラール，佐賀大学教育学部研究論文集，**31**(2): 147-163, 1984.
19) 内海和雄，第４章 体育科の目標・学力・評価，体育科の「新学力観」と評価，75-98,大修館書店，東京,1995.
20) 八並光俊，第１章良い授業とは－学生と学生文化から－，片岡徳雄,喜多村和之編，大学授業の研究，20-36,玉川大学出版部，東京, 1989.